子どもの可能性を育てるために

～教師の言葉かけに注目して～

京都教育大学大学院　連合教職実践研究科
教職実践専攻　生徒指導力高度化コース
126037　小暮直也

子どもの可能性を育てるために
～教師の言葉かけに注目して～

小暮直也
生徒指導力高度化コース

要約：筆者は、やる気に乏しい生徒達と教育実習で出会った。何をするにも「めんどくさい」という生徒達にどのように言葉をかけてよいか悩んだ４週間であった。では、子ども達が学校で意欲に満ち、生き生きと生活するために、教師はどのような言葉をかけることができるのだろうか。本稿では、まず教師の言葉かけが子どものやる気に影響を与えることを示した。次に教員等にアンケート調査を実施、分析することで「やる気を高めた言葉かけ」の要素「やる気を低めた言葉かけ」の要素を抽出した。その結果、教師の意図がどのように伝わるかがやる気に影響を与えることが明らかとなった。しかし、教師の意図が伝わったにもかかわらず、やる気が低下した事例もあった。その場合、子どもの求める言葉かけができているかということが重要であることが分かった。最後に教師の言葉かけには顕在的メッセージと、教師の意図的・非意図的な潜在的なメッセージがあることを示した。この非意図的で潜在的なメッセージが伝わったとき、教師は知らないうちに子どものやる気を低めていることを考察した。

キーワード：やる気、自己効力感、言葉かけ、メッセージ、子どもの想い

１．はじめに

筆者はどのような言葉をかけてもやる気に乏しい生徒達に教育実習で出会った。その生徒達の眼には力がないように見え、何をするにも「めんどくさい」という言葉を発していた。そのような生徒に、どのように言葉をかければよいのかという悩みを抱えた４週間であった。筆者は学校にいる生徒には、生き生きとしてほしいと願っている。勉強でも部活動でも何でもよいが、「やればできる」や「やってみたい」とやる気に満ちて生活してほしい。

では、そのような子どもがやる気に満ち、生き生きと学校生活を送るために教師はどのよ

うに彼らの行動を意味づけ、言葉をかけられるのだろうか。また教師の言葉かけによって、子どもがやる気を失い、可能性を閉ざしてしまうことはないのか。本稿では教師が子どもにかける言葉をメルクマールとして子どものやる気を引き出す教育の在り方を考察したい。

2. やる気と言葉かけ

2−1 人がやる気を出す要因

外山（2011）はやる気を「ある行動を引き起こし、その行動を持続させ、結果として一定の方向に導く心理的過程」として定義した。では、人はどのような状態の時に、やる気を出すのだろうか。例えば、「宿題をすればお菓子をもらえる」ときや「褒美はなくても自分は野球が好きだから野球をやっている」というときにはやる気が出るだろう。つまり、「宿題（行動）をすればお菓子がもらえる」「野球（行動）をやれば楽しい」というように、行動すれば自分が望む結果が得られるときにやる気が生まれる。

ここからは理論的見地から探ってみよう。やる気に関する理論として、自己効力感（セルフ・エフィカシー）という理論がある。バンドゥラは、自分がその行動をうまく行えるかどうかの予測の程度を自己効力感と呼んだ。そして、彼は人がやる気を起こし行動するには二つの期待が必要であるとした。一つ目は効力期待（自己肯定感）で、二つ目は結果期待である。結果期待とはある行動を行えばある結果となるだろうという予測である（図１参照）。

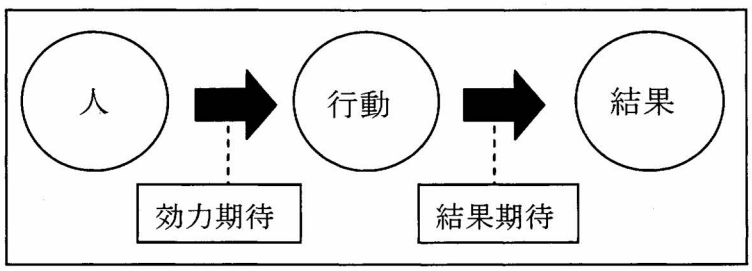


図１ 伊藤（2012）から転用

例えば、前述したお菓子の例で言うと、宿題をすればお菓子をもらえることはわかっていても（結果期待は高い）、宿題を最後までやる自信がない（効力期待が低い）場合、やる気は高まらず宿題を放棄するということになる。つまり子どものやる気を引き出そうとするなら、子どもの結果期待を高めることと効力期待（自己効力感）を高めることが必要ということになる。結果期待は本人が行動の結果に価値を感じた時に高まる。では、どうすれば効力期待が高まるのかということを次節で探っていきたい。

2−2 自己効力感を高めるために

バンドゥラによると、自己効力感は四つの要因によって影響を受けるという。以下に、バン

ドュラが言う自己効力感を高める要因を伊藤（2012）を参考にまとめていく。

一つ目は、達成体験である。達成体験とは、自分で行動し達成した経験のことをいう。

二つ目は、代理体験である。代理体験とは、他者が何かをやり遂げて成功した体験を観察することをいう。ただ、達成体験に比べると、自己効力感の形成に与える影響は弱いとされる。

三つ目は社会的説得である。社会的説得とは、自分の行動に達成の可能性があることや、自分に能力があることを他者から言語的に繰り返し説得されることをいう。もっとも手軽で日常的に用いられている自己効力感の形成手段とされる。しかし社会的説得のみで高められた自己効力感は消失されやすいという問題点もはらんでいると言われている。

四つ目は、生理的・情緒的喚起である。自己効力感は、肯定的な気分の時に高まりやすく、否定的な気分の時は下がりやすいとされる。

ここで、注目するのが三つ目に挙げた社会的説得である。教師が子どものやる気を高めようと言葉をかけるのは社会的説得に当てはまる。しかし、言葉による説得は自己効力感を高めにくいという指摘があることも確かである。この点について、次節では自動動機の観点から考察してみたい。

2−3　言葉かけのもたらす影響

ターナー（Turner et al., 2002）は熟達目標志向の子どもが多いクラスでは教師が学習者の動機づけを促すような言葉かけや行動を多く行っていることを明らかにした。熟達目標志向とは、増大的知能観をもつ個人の行動パターンで、挑戦的で忍耐強い行動を示す。増大的知能観とは、自分の能力は努力次第で伸ばすことができると考える知能観で、ドゥエック（2008）が推奨する知能観である。ここでは、言葉かけが個人の考え方にまで影響を与えることを示している。これについて中谷（2012）も「日常的・継続的な授業実践での教師の言葉かけや行動の蓄積が子どもに影響を与え、目標形成に大きな意味をもつ」と述べている。

中谷は指摘していないが、この理由としては「自動動機」という理論から説明できそうである。及川（2012）によると、自動動機とは、「無意識の目標達成のメカニズム」であるという。自動動機では「人は、意識することなく自分を取り巻く周囲の状況にそれとなく注意を払い、無意識の内に適切な目標を設定し、自動的にその達成に必要な行動調整に向かう」とする。つまり、自らが特別に意識しなくとも、周囲に影響を受けてやる気を高めるということである。

以上のことから、教師の日々の言葉かけの質によって、子どもに自動動機を生じさせ、熟達目標志向に導いていくことが可能ということになる。

この自動動機の観点から考察すると、日々の粘り強い社会的説得によって、生徒の自己効力感を高めることは可能といえる。社会的説得によって効力期待を高めることと、子どもの行うことを積極的に意味づけて結果期待を高めることが教師の言葉かけの中で行われていれば、子どものやる気は自ずと高まる。

では、教師はどのような言葉かけで子どものやる気を引き出そうとするのだろうか。そしてその言葉から要素を抽出することができれば、よりよい言葉かけの在り方を導き出せるのではないだろうか。次章以降で検討してみたい。

2－4　言葉かけのもたらす不幸

これまでの考察により、教師の言葉かけが子どものやる気に大きな影響を与えるということがわかった。しかし、言葉かけに関してはこのような指摘がある。それは、吉川・三宮（2007）の「おそらくは非意図的ではあろうが、子どもの学習意欲を低下させる教師の言葉かけは、少なからず見受けられる」という指摘である。また、ドゥエック（2008）は親や教師の言葉かけの文章に注目し「子どものためを思って発した小言や励ましの言葉が、親の意図とは裏腹のメッセージを伝えている場合が少なくない」と述べている。しかし、励ましたのに相手のやる気が高まらなかった経験、逆に言うと、誰かに励まされたのに励ましが嬉しくないという経験は誰にでもあるのではないか。そして、励まされたのに嬉しく感じなかったときのネガティブな感情はひとしおである。それは言葉を発した者との人間関係も関係するだろう。ただどのような場面でこのような不幸が起きるのかを言葉かけの面から考察する意義は少なくない。したがって、不幸にも非意図的に伝わるメッセージについても、次章以降で考察することとしたい。

3. 調査の目的と方法

3-1　目的

第１章・第２章で述べたことを踏まえ、以下に述べる研究では子どものやる気を高めた、またはかえって低めた教師の言葉かけの要素を抽出することで、教師のよりよい言葉かけの在り方を調査する。さらに、2－4で述べたドゥエック（2008）の指摘を踏まえ、教師の言葉に含まれている非意図的なメッセージについて検討を加える。

これらを考察するために、教師側からみた言葉かけを調査する。なぜなら、言葉の意味だけでなく、教師がどのような意図のもとにかけた言葉でやる気が高（低）まったのかを考察したいからである。さらに、教師が言葉をかける際にどのような意図を持っていたのかということ

が、言葉の非意図的メッセージを探るうえで重要になると考えたからである。

3-2 方法

① 調査対象：小・中・高等学校現職教員や教職経験者 56 名（京都府・高知県・徳島県）

② 調査手続き:A4判の用紙1枚に教師が過去に子どもにかけた言葉に関する質問をした。

〈教師が子どものやる気を高めたと感じた言葉〉

1－1あなたの言葉かけで、子どもの意欲が最も向上したと感じた場面とその言葉を教えてください。

1－2その言葉は、どのような意図で子どもにかけた言葉ですか。

〈教師が子どものやる気を低めたと感じた言葉〉

2－1あなたの言葉かけで、子どもの意欲がかえって低下したと感じた場面とその言葉を教えてください。

2－2その言葉は、どのような意図で子どもにかけた言葉ですか。

2－3なぜ、意図に反して低下したと感じますか。

※アンケートの設問では「子どもの意欲」となっているものは、本稿では「子どものやる気」として考察する。

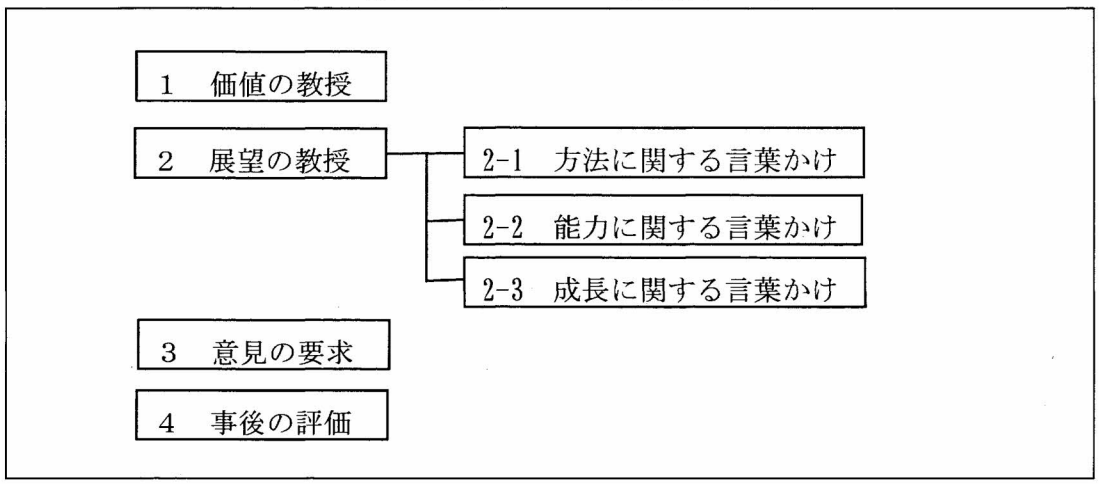
※アンケートから引用する場合は「」をつけ、原文ママの状態で引用する。

4. 結果の分析

4－1 やる気を高めたと考えられる言葉の分析

やる気を高めた言葉かけは、56名から、69の事例を抽出することができた。結果の一部を分類してみると、表1のようになった。

表1 肯定的な言葉かけでやる気を高めたもの



やる気を高めた言葉かけを大きく分けると、子どもに対して肯定的な「前よりよくなったね、がんばったね」などの言葉かけ。否定的な「テストの点が思ってたのよりもよろしくない人、このままだと、クラスの仲間を「先輩」と呼ぶことになります」という言葉かけがあった。言うまでもないことだが、受け手に対する肯定的な言葉かけは、子どものやる気を高め、否定的な言葉かけはやる気を低める。そしてこのことは吉川・三宮（2007）、小森（2012）も述べている。

アンケートの結果、肯定的な言葉かけでやる気を高めるのに有効な言葉かけは「価値の教授」「展望の教授」「意見の要求」「事後の評価」に分けることができた（表１）。

【価値の教授】 子どもの結果期待を高めるために、教師が目標達成した時のメリットを説き、「楽しそう」「やりがいがある」などと感じさせ、その目標達成の価値を高めるものである。また、子どもにとって新たな価値を提供するものでもある。例えばアンケートには、駅伝の大会前に「みんなの持ち場は違うけれど、その自分の持ち場で力をひとつにしてがんばろう」という言葉かけがあった。この言葉は「勝つ」という到達目標以外に、持ち場で力を発揮するという新しい目標を提示するものである。この新たな目標に子どもが価値を見出したため、生徒のやる気が高まったといえる。つまり、バンドゥラの理論でいう結果期待が高まったのである。

【展望の教授】 教師が達成への見通しを持たせることで、子どもに「これはできそうだ」という気持ちを持たせるものである。したがって効力期待を高めるものである。展望の教授にはさらに三つの要素があった。

方法に関する言葉かけ これは、目標達成と現在の実力との距離がどのくらいあるかということや、どのような方法で努力すれば目標達成に近づけるのかという、子どもの達成を具体的にサポートする言葉かけである。例えばアンケートには「放課後も頑張って練習しているね。随分腰も上がるようになってきたから、もう少しでできるよ」という言葉かけがある。この言葉かけは、具体的な上達の方法と目標達成までの距離を示している。このように、どうすれば達成できるのかという方法を伝える言葉かけで子どものやる気が高まっている。

能力に関する言葉かけ これは、自身の持つ能力なら、目標を達成することができると子どもに感じさせる言葉かけである。それはアンケートにある「できると信じている」という言葉かけに顕著に表れる。この言葉かけは、教師が子どもの能力を保証したので「自分なら達成できるだろう」と感じ、子どもが成功への見通しを持ったと考えられる。ちなみに、子どもの能力や今までの努力を知らないのに「できると信じている」と言葉をかけたのなら、子どもは「どうしてそのようなことが言えるのか」とやる気が下がってしまうことが推察される。

成長に関する言葉かけ　この言葉かけは、子どもの努力などの軌跡を教師が意味づけして「今までこれだけ出来たのだから、できるだろう」と子どもに達成への展望を持たせるものである。アンケートでは「うまくなったね、その調子」というように、今までの成長を言葉にし、このままやれば達成できそうだという見通しを子どもに持たせる言葉かけが検出できた。

【意見の要求】　質問をして子どもに考えを話させることで、自己決定を迫るものでる。例えば「この時間、何ができるようになりたい？」という言葉かけがあった。ダニエル・ピンク (2010) によると、自己決定はやる気の重要なキーワードとなるものである。自分の考えを述べ、自己決定させることができれば、やる気が高まるといえる。

【事後の評価】　「これを今やりたい」というような現在のやる気に繋がるものではない。しかし、生徒の達成体験を評価し意味付けする言葉かけと言え、次のステップに繋がるやる気を高めることができる。例えば「がんばったね」という言葉かけがあった。

以上の要素を見てみると、教師が効果があると感じた子どものやる気を高めた肯定的な言葉かけは、バンドュラやピンクの動機づけ理論で裏付けられるものであった。

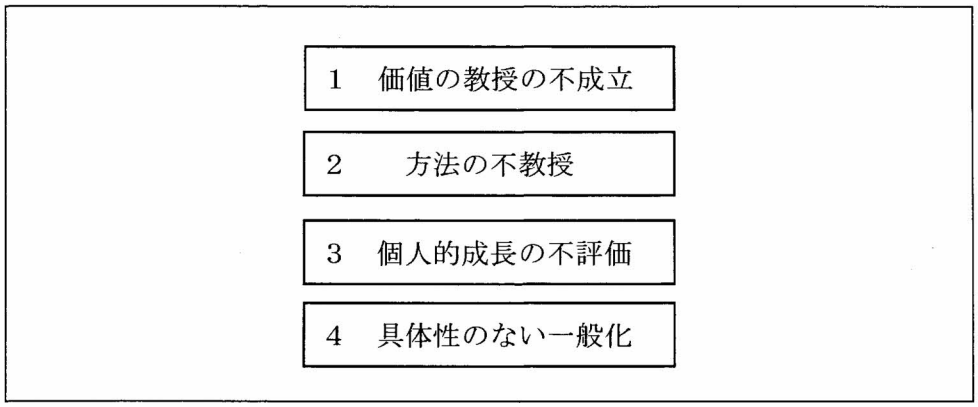
一方、否定的な言葉かけにもかかわらず、子どものやる気が向上したという例も見られた。その場面で教師は「危機感をあおるとともに、自分はできたのに（やらなかったから失敗した-筆者註）と反省を促させ」る意図のもと、否定的な言葉かけをしていた。言葉は否定的な印象を与えるものの、教師の真意は否定的なものではなかった。反省を促しやる気を引き出すという教師の意図がそのまま生徒に伝わったためやる気を引き出すことができたといえる。このことは肯定的な言葉にも当てはまる。ここから言葉の意図が伝わるかどうかが言葉かけの重要なメルクマールとなりうることを示している。

4-2　やる気を低めたと考えられる言葉の分析

やる気を低めた言葉かけは、56名から、47の事例を抽出することができた。言うまでもなく、受け手に対する否定的な言葉かけでは子どものやる気は低下していた。一方、肯定的な言葉かけにも関わらず、子どものやる気が低下している例が数多く検出された。それに関しては、前述した（2－4）吉川・三宮（2007）の指摘もある。しかし、それは今回のアンケートを見ると学習意欲に限ったことではないし、「少なからず」というよりは「数多く」といったほうがよい。

一体どのような言葉かけでやる気が低下したのか。その要素を探ってみると表２のように分類することができた。

表２　やる気を低めた言葉のうち肯定的評価を与えるもの



【価値の教授の不成立】　教師が行為の価値を語ったものの、子どもがその行為に価値を持たなかったというものである。これについては「朝学習でどうして算数なんかせなあかんの？」という子どもに対して「がんばろう！」と言葉をかけた場面で、子どものやる気が下がるという例が見られた。教師は数学を解くことに価値を見出していない子どもに対してがんばるという価値を示した。しかし、子どもにとっては、何ら動機づけになっていないことが読み取れる。数学を学ぶ価値を知りたいという子どもの問いに、がんばるという別の価値観で答えてやる気を高めようとしたが、価値を感じなかったため結果期待が高まらずやる気が下がったといえる。

【方法の不教授】　達成するためにどうすれよいかということが不明確なアドバイスのため、子どものやる気が低下するものである。例えば、「学習」の場面の、「やったらできる」という言葉かけで、やる気が下がった例がある。それについて教師は、「無責任な発言と（子どもが-筆者註）受け取ってしまたため」やる気が下がったと述懐した。この例ではどうすればやればできるかが明確でない。したがって、子どもは教師の言葉かけを無責任と感じて効力期待は高まらず、やる気が低下したといえる。

【個人的成長の不評価】　子どもの成長を看取るのではなく、他者との比較や結果だけを見て評価したためにやる気が下がるというものである。例えば、家庭学習の字が乱雑だった子どもに対して「もう少し丁寧に書けるとよかったね」と言葉をかけた例がある。教師は「結果だけを評価した」ためやる気が下がったと振り返っていた。その子にとっては家庭学習をやってきた過程を評価してほしかったため、やる気が下がったといえる。

【具体性のない一般化】　教師が誰にでも当てはまる一般的な言葉をかけると、自身のことを理解されていないと子どもが感じ、やる気が低下する。アンケートでは「部活動で技術がうまい生徒が周囲に暴言をはいていた」という状況で、「今はできないこともあるけど、毎日の練習をがんばっていこう」と教師が全体の場で指導した例がある。「「技術が人より上だ」と思い

込んでいる生徒は、自分のことをわかってもらっていないと感じ」やる気が下がったとされている。それは、やる気が下がった子どもにとって、個別的具体的でない言葉かけであったため、やる気が下がったと考えられる。その子にとって個別的な言葉かけが大切なのである。

以上、四つの要素に分類した。しかし、どの場面も「ほめる」などの肯定的意図をもった言葉かけにもかかわらず、教師は子どものやる気が低下していると感じていた。やる気が低下した場面では「ほめる」などの教師の意図が伝わっていないのである。このことを踏まえ、以下に考察を加えていきたい。

5. 考察

5－1　教師の意図と子どもの想い

子どものやる気を高めた言葉とやる気を低めた言葉を比較したとき、特に注目すべきことがある。それは教師の意図が子どものやる気に関係するということである。教師の言葉に込めた意図がそのまま子どもに伝わっていればやる気が高まるし、教師の言葉に込めた意図が伝わっていないときはやる気が低まる。4－1の否定的な言葉かけの事例のように、言葉の上では否定的な内容であっても教師の意図が子どもに届き、やる気が向上した場合がある。さらに、4－2の【価値の教授の不成立】の事例では肯定的な言葉をかけたとしても、意図が伝わらず子どものやる気が低下させる場合がある。つまり、言葉かけには言葉上の意味と、言葉に込められている意図があり、意図がどのように伝わるのかが大切ということになる。

教師は、子どもを否定しようと意図して言葉をかけるわけでは決してない。子どもに変容を促すために最適な言葉を選択すべく努力する。そのため、言葉上では否定的な言葉を使った場合でも、教師の意図としては肯定的な意図を込めているのである。

これらのことを表３にまとめてみる。Ⅰでは、教師はやる気を高めるために言葉上も意図としても肯定的な言葉かけをして、子どもにも肯定的な意図が伝わっている。Ⅱでは、教師は言葉上否定的な言葉をかけているが、やる気を高めたいという意図がある。その結果、否定的な言葉かけではあるが教師の意図した言葉の意味が伝わっている。これは、教師の言葉かけを子どもが納得したため、肯定的な意図

表３

		教師の意図（やる気を高めたい）	
		肯定的な言葉 ex）がんばれ	否定的な言葉 ex）あかんやろ
生徒への伝わり方	肯定的に捉える	Ⅰ 先生が応援してくれている！	Ⅱ こんなことではダメや！
	否定的に捉える	Ⅲ これ以上何をがんばればいいの	Ⅳ ぼくはあかんのや

が伝わったといえる。次にⅣでは、教師のやる気を高めたいという意図は伝わらず、言葉通り否定的な言葉の意味が伝わっている。しかしⅢでは、言葉上の意味も教師の意図も伝わっているがやる気は起こらない。なぜなら伝わってしまったのは「今までのがんばりではダメです」という否定的なメッセージだからである。教師は全く意図していないだろうが、言葉上からは一見読み取ることができない潜在的な否定のメッセージが問題を引き起こしている。この表３から、言葉上が肯定・否定的だから子どものやる気が高まるのではなく、たとえ教師の意図が伝わったとしても子どものやる気が高まらないことがあるとわかるのである。

ではなぜ、Ⅲのような結果となるかというと「子どもがかけて欲しい言葉」と教師がかけた言葉にミスマッチがあったためだと考える。ここで子どもが求める言葉かけは「今までがんばってきたね。これからは～に気をつけてみよう」などの達成への方法を伝える言葉かけである。見てほしいことを見て言葉かけをする。指摘されたいときに具体的に言葉かけをする。そして価値を知りたいときには価値を伝える言葉かけをする。このように子どもが欲っする言葉かけと教師の言葉かけの意図が合致したときに子どもはやる気を起こす。したがって「子どもが今教師の口から聞きたい言葉はどのような言葉なのか」に意識を向けることが大切なのである。ちなみに櫻井（2009）は「子どもの立場になって考える」ことがやる気を育てる言葉かけの基本的な条件だと述べており、本項の考察と相通ずるものがある。

子どものやる気を高める言葉かけをするためには、言葉の上の意味や言葉に込められている意図も重要だが、それ以上に子どもの想いに注目しなくてはならない。そして、潜在的に伝わってしまう否定のメッセージに配慮しなくてはならない。

5－2　やる気を高めた言葉の潜在的メッセージ

多くの場合、教師の意図が伝わるとやる気が高まる。しかしその言葉には非意図的で潜在的な否定のメッセージが含まれている可能性がある。

例えば、アンケートで「～はよくやった」「～いいことしたな」というやる気を高めた言葉かけがある。この言葉の「～」にはAさんBさんのように子どもの名が入る。ここで、子どもA・Bがいる前で、Aの行為を「Aくんの行動はすごく良かった」とほめる場面を想定し、表４にまとめてみよう。この言葉かけには、教師の意識として二つの意図がある。

それはAのやる気を引き出すという意図、Aの行為に学んでBのやる気を引き出すという意図である。後者は言葉の潜在的メッセージをむしろ有効に使い肯定のメッセージを伝えようとする教師のスキルである。しかし、この言葉をかけた教師の想定外の結果としてAやBのやる気が

表4

		教師の意図	
		Aのやる気を引き出す	Bのやる気を引き出す
教師の意識	教師の想定内	○ Aがほめられたことでやる気が高まる	○ BがAの行為に学んでやる気が高まる
	教師の想定外	△ Aがほめられたことでやる気が下がる	× ほめられているのを見てBのやる気が下がる

低まるという場合も考えられる。Aのやる気が低まる場合は、Aの想いと食い違った（ほめてほしいことではなかった）ためということが考えられる。例えば「こんなことでほめられたくない」と想っていたならやる気は低下する。この点は、やる気を引き出そうと肯定的な言葉をかけた教師の想定外とはいえ、子どもの求める言葉であったのかを顧みることで、かけるべき言葉は明らかになるだろう。

しかし、Bのやる気が下がるのは、ほめられたAに対して自分がほめられなかったことから自分の行為が否定されたと捉えたからだと考えられる。この点を教師は意識できているのだろうか。Aをほめ、やる気を高めている場面で、「君は駄目なことをしている」と非意図的潜在的なメッセージをBに発し、やる気を低めているのである。つまり、教師の意図通り、Aのやる気を高めることに成功した言葉が、Bのやる気を低めてしまうのである。

ここから教師の言葉は、言葉をかけられた本人のみならず、本人以外の子どもにも言葉上のメッセージ（顕在的メッセージ）と潜在的メッセージを投げかけていることがわかる。言葉一つが、子どもの状態によってさまざまに解釈され、その子に影響を与えているといことに教師は留意しなくてはならないのである。言葉の意味、教師の意図だけでなくどのようなメッセージがどの子どもにまで伝わるかが大切で、それはAにせよBにせよ子どもの想いと合致しているかが重要なのである。それを考えずして、すべての子どものやる気を高めることはできない。

6. おわりに

以上の考察によって、教師が子どもに言葉をかける際に意識すべきことが明らかとなった。言葉上の意味、言葉に込められた教師の意図は子どものやる気を高めるためには大切である。しかし、それ以上に子どもの想いを看取ることが大切といえる。やる気を高めるために子どもに意図を伝えようするだけではすべての子どものやる気を高めることはできない、子どもの言ってほしいことが言えるかが重要なのである。この観点からみると、子どもの言ってほしい言葉を4－1の要素をもった言葉で語ることがきるかが教師に求められるのである。では、どのように子どもの求める言葉に気づけばよいのか。それは今後の課題としたい。

そして、言葉には言葉の上のメッセージ（顕在的メッセージ）と潜在的メッセージが含まれている。そのメッセージは言葉をかけられた子ども、言葉を周りで聞いている子どもなどによって伝わるものが変わってしまう。その点を考慮し、慎重に言葉を選ぶ必要がある。特に非意図的潜在的なメッセージに対する配慮は大切である。しかし、このメッセージを全てなくすことはできない。言葉をかけた子どもだけでなく、周辺の子どもをも含めたすべての子どもが求める言葉かけは不可能だからである。しかし、その影響を知ることで生徒の変化に気づきフォローすることができる。この点は生徒指導上からみても重要といえよう。

最後に一つ、言葉かけを考察する際に注意しなくていけない点があることを指摘する。それは、人間関係やノンバーバルな部分が言葉かけには大きな影響を与えるということである。例えば「がんばれ」と言う時でも、目を見るか否かで印象が変わってくる。このようなノンバーバルコミュニケーションをどのように位置づけるかという点は今後の検討課題といえる。

引用・参考文献

1) A・バンデューラ、本明寛・野口京子監訳（1997）『激動の時代の自己効力』金子書房

2) 伊藤圭子（2012）「「できる」はできるという信念で決まる」（鹿毛雅治編（2012）『モティベーションをまなぶ１２の理論』金剛出版、以下、『１２の理論』と略す）245－280

3) 及川昌典（2012）「知られざる力」（『１２の理論』）135－160

4) キャロル・S・ドゥエック、今西康子訳（2008）『「やればできる！」の研究』草思社

5) 小森芳順（2012）「児童生徒のやる気に影響を及ぼす教師の言葉かけについての一考察」初等教育学研究報告　1、1－6

6) 櫻井茂男（2009）「やる気が育つ言葉かけの条件」『児童心理』12月号、金子書房、2－10

7) ジェア・ブロフィ、中谷素之監訳（2011）『やる気をひきだす教師』金子書房

8) 外山美樹（2011）『行動を起こし、持続する力』新曜社

9) ダニエル・ピンク、大前研一訳（2010）『モチベーション3.0』講談社

10) 中谷素之（2012）「何をめざして学ぶか」『１２の理論』、195－222

11) 吉川正剛・三宮真智子（2007）「生徒の学習意欲に及ぼす教師の言葉かけの影響」『鳴門教育大学情報教育ジャーナル』　4、19－27

12) Turner, J. C., Midgley, C., Meyer, D. K., Anderman, EM., Kang, Y. &Patrik, H., 2002, The classroom environment and students'reports of avoidance strategies in mathematics:A multimethod study. Journal of Educational Psychology, 94, 88-106.